

中高生とともに差別と闘う

『新年会』

吉成タダシ



前号で、「お正月の楽しみと不安」についてお話ししました。今年のお話についてひとつ。

一月、二十三歳になる教え子たち数人が集まり新年会をするという場と呼んでもらいました。九人のこぢんまりとした飲み会でしたが、ワイワイガヤガヤ、楽しい飲み会でした。来ていた男子五人みんなが地区出身なのですが、たわいもない近況報告から、次第に中学時代にしていった人権学習へと話は進んでいきました。

リクは、学校の先生になりたいと県外の大学で教職課程をとり、現在は地元に戻って教育関係の仕事に就いていました。私の左隣に座っていたリクが、切り出しました。

「先生、部落差別ってあるんですかねえ。今ひとつ実感がありませんよ」「そう！オレもそう思う」

私の反対側、右隣にいたヒロが、リクの一言に反応しました。

「あの時の勉強は役に立ってるけど、実際に部落差別は感じたことない」
良いことと言えば良いことなのですが、果たして本当にそうなのか。深く見られていないだけなのでは、と思っていると、テーブルの向かいに座っていたリョウタが絡んできました。

「オレのところは子どもが産まれてから変わった」

実はリョウタ、中学時代は自分が地区出身であるということを知りませんでした。母親が校区外の地区か

ら校区の地区外に嫁いできており、そのことをリョウタに言っただけでなかつたからでした。ですから周りのみんなは、リョウタのことを「地区外の友達」と認識していたのです。

「実はオレも地区出身なんよ」

彼の告白に、周りのみんなも驚いたと思います。一瞬間があいたあと、話し出したリョウタに耳を傾けました。

「オレも結婚のときにいろいろあった。それでも、勉強して差別する方がおかしら分かってたから、くじけずにいられた。相手の親も最後まで賛成っていうわけではなかったけど、子どもが産まれてから少しずつ変わってきた」

リクが続きます。

「先生、オレつきあう彼女には、必ず自分の立場を言うようにしてるんです。深いつきあひになつてから言つて、互いに傷つくのは嫌だから。けど、彼女に言つて親から何か言われたつてことはないんです」

「彼女は本当に自分の親にちゃんと言つたのか？ 言えてないんじゃないか？ 彼女が親に言うには相当なエネルギーがいる。自分の親が差別者かどうか試されるわけだから」

私は続けてヒロにも言いました。

「春にするお兄さんの結婚はおめでとうだけど、相手の人とは何なのかあったのか？」

「相手の人も同じ立場の地区出身なので、何もありませんでした」
聞いて、複雑な心境になりました。

地区・地区外の結婚も見てきました。が、結婚のときに傷つかないようにと、取って地区同士の結婚を選んだケースもいくつも見てきました。向かいにいたユウトがしゃべり始めました。

「オレが結婚できたのは、相手のおばあちゃんが亡くなったから」

驚いたようにみんなが視線を向けます。

「ユウトも何かあったのか？」

「オレんところは、彼女のおばあちゃんが反対で。けど、家が火事になつておばあちゃんが亡くなった。それで結婚できたようなもの。だから喜んでいいのかわからなかった」

いつも明るく元氣者のユウトなので、幸せな家庭を築いているとばかり思い込んでいました。だからそんなことがあったとは、思いもよりませんでした。

「ちょっと、アツの話も聞いてやって。彼女の親に反対されてるつて」

リョウタがアツにふります。口数のあまり多くない誠実なアツが、ぼつりとしゃべりました。

「今、相手の親につきあひを反対されてて…前の彼女の時もそうで…」

説得を試みているのだけど、うまくいかないと言います。それに対して、「子どもつくつたらいい」と、リョウタ。「そんなこと言つてしまえば、勉強する意味がなくなつてしまう」と、ユウト。

このあとも、五人はケンケンガクガクの話し合いを続けていきました。

それは、中学時代の人権学習の姿そのものでした。彼らのなかで人権学習は終わつてなかつたのです。けどそれは、当時の人権学習があつたからこそ可能だったのでないかと思えます。もしあの頃の徹底した学習がなければ、何でも言い合ひ、相談できる関係性はなかつたのではないかと思うのです。

生きていると、何が正しいのか、どの道が正しいのか、分からなくなつてしまうことがあります。けどそこで独りで抱え込まずに、相談できる、ひとこと言える、そんな仲間づくりが、学生時代に必要ではないかと、あらためて思わせられました。彼らの身に起こっていることは、二十年、三十年前にあつた、どこか遠いところの出来事ではありませんが、今、まさにここで起こっている、リアルな現実です。部落差別が無くなつたとか、見えにくくなつたとか言われることがあります、それは単に知らないだけ、知ろうとしないだけのように私には思えます。

彼らのように壁にぶつかつても、仲間と共にたくましく壁を乗り越えていけるような、その壁をぶち壊してしまふような、そんな学びを、義務教育の間に、力として持たせておきたいと、気持ちを新たにしたい一夜でした。いつかまた再会し、「その後」を語り合ひ、中学時代そのままに、みんなで支え合ひ、励まし合ひえる関係性の輪のなかに、自分も居続けたいと思いました。